

【ケニア洪水救援事業】

臨床検査技師 喜田 たろう

ケニアでは過去数年来の深刻な干ばつの後、2006年11月中旬頃より異常な豪雨に見舞われ、過去50年間で最悪の洪水被害が発生し、全土で72万3千人もの人々が被害を受けました。

日本赤十字社は、国際赤十字の一員として洪水被災者救援のため、オーストラリア赤十字社との合同による基礎保健ERUチームを同国へ派遣しました。今回私は12月21日から5週間同国へ派遣され、連絡調整・管理要員として活動、また調査活動の一環として現地医療機関の臨床検査施設を訪問する機会を得ました。

日本・オーストラリア赤十字社医療チームは、タナ川流域のガルセンにおいて、仮設診療所を設置して医療活動を行う一方、同地で車輻及びボートによる調査・巡回診療等を実施していました。ガルセンは日中の気温が40度近くまで上昇する非常に環境の厳しいところです。はるか地平線までサバンナが続き、タナ川にはワニやカバが生息、われわれの宿舎にもサソリやヘビが住み、マントヒヒの群れがやってきます。私の派遣時は、ほとんど雨は降っていなかったものの未だタナ川の水位は高く、道路わきには避難民の仮設テントが立ち並んでいました。また蚊などの虫が多く、夜間不用意に照明をつけると周りに虫柱(?)が立ちます。マラリアの流行地でもあることから、虫に対する対策は重要でした。



洪水により水没した家



洪水で寸断された道路



連絡調整会議で他団体との話し合い 臨床検査施設を訪問し聞き取り調査

現地ではリフト・ヴァレイ・フィーバー(以下、RVF)と呼ばれる、蚊などの吸血昆虫が媒介する出血熱が流行していました。本疾患対策として同国保健省や他のNGOとの合意に基づき、RVF患者の後送医療施設に指定された国立病院に対する支援活動を行いました。また現地医療従事者への感染予防教育は、当院の池田看護師を中心に赤十字が担当しました。

現地の医療システムが復旧するのに伴い、われわれの仮設診療所の閉鎖が決定されました。地域住民からは、診療活動継続の要望書が提出されるなどしたものの、撤収の際には混乱もなく、むしろ人々が自主的に集まり、われわれと一緒に埃だらけ汗まみれになりながら、撤収や後片付けを行っていただきました。また診療所閉鎖と並行して、ケニア赤十字社のスタッフやボランティアを対象とした、診療所テントの展開と撤収の訓練を行うこともできました。

今回初めてのERU管理要員という立場に戸惑うことばかりでしたが、経験豊富な前任者やチームリーダー、周りのスタッフの助言や支援に支えられて無事に任務を終えることができました。また「アフリカ時間」という言葉がほとんど通用しないくらい時間に正確で、責任感の強いケニアの人々にも何度も助けられました。



仮設診療所で診察の順番を待つ人々



ケニア赤十字社の協力を得て
物資を搬送



ケニア赤十字社のスタッフと協力して
診療所の撤収